

30472
教科書文庫

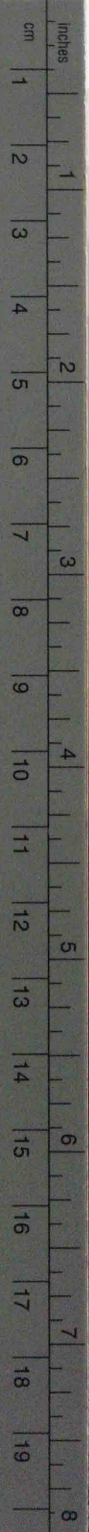
3
810
51-1887
0130 449326

Kodak Gray Scale

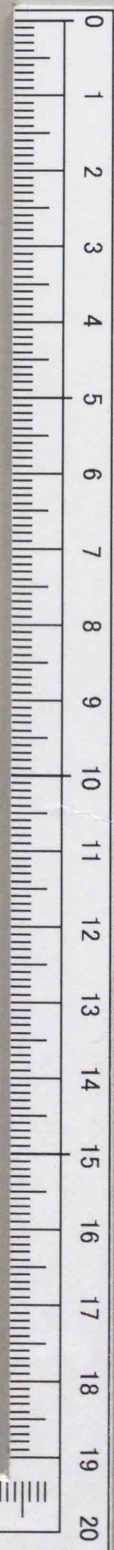
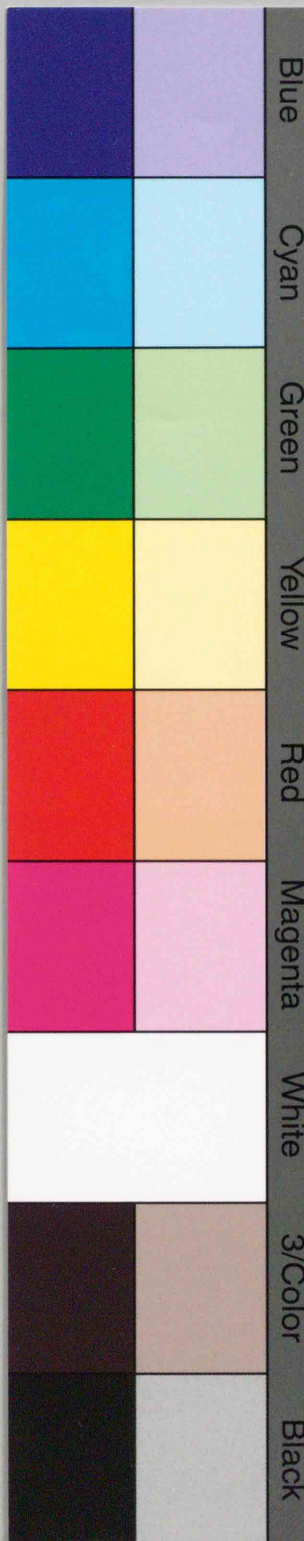
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak



Kodak Color Control Patches



和文讀本
和知可讀
卷一



ついでにケド
中古の奈良朝以前

こそ
バカリ
ついでに
タリ
さへ
コデ

和文讀本緒言



上古のハ、いもゆるマニモウガナ萬葉假字伊呂波こそ有の
 き。平假字。いもゆるは片假字。イロなどいふ物とて
 をなかりけれバ、殊に意して、其の詞を誤らせ
 くとある歌をどむかりこそ、萬葉假字おても
 書きのき。大方の文詞をバ、萬葉假字して書き
 んハ、徒に字面此長くあるがうへは、字畫さへ
 多くて煩しきバ、為ん方をくて、不便をあら
 小漢文をのそ用ゐる。全く假字して書く事と
 てハ、あり望つて、中古平假字片假字といふ。

和文讀本緒言

一

広島大学図書

0130449326



のころハロヤカミシ
大書スル
だけくハロドク

最便よきもの出来てより後ハ彼の不便ある漢字漢文をバ用ゐて事足るべきを。あや世の人さきより讀み習ひ書き來る癖うせどして字よりハへを漢字。文よりハへバ漢文。他ハ字も文もなきやうに思ひて。實事實學よつきりの利害を。よくも考へだ。た漢字かき散。漢文讀もの。しるを。たけく才ある様は思ひとりて。吾も人を。其の方ハ學小の心をいせて。先漢字つらひあらひ。漢文よる習ふやど。許多の年月を過して。や筆

はのしハラチガ
アツ即ハカドルフ

おせるハカツエラゲル
あまのしハラチガ
おまのしハラチガ
おまのしハラチガ
のしハライヨ
よしハラチガ
マア

とるをありかきせ。ちや齡をけ氣衰へて。をいづ。物物の用もた。かく志。若き壯の程をバ徒過。老て後。世間一般ハ不通此漢文を。人ハ煩多き漢字を教ふる事。力の費して。世の為國此為。ハ。させる益をも得せ。あら生涯を盡。ハ。べての學者此弊。いとも。口惜。事の限あり。縦。い。漢字をバよく識り。漢文をバ巧。あくと。世之を讀む人解。人少く。何。ハ。よ。よむ人解。人多

唐土人

くとも御國の人悉く唐土人あらねばな常
を口するハ御國ぶ是れ語を使ひ御國ゆりの音
を出さざれば得有るべからずを口するハ御國
の語音採用ありて文ハ唐土此文を書りて
ハ得あらざるとならんハ彼の楚人して齊語を
へさするよりも拙き事ありて唐土人
おも笑むをぬるさハいふも更めていつも文
と語とも似まつらぬものありてた便あ
りきのみならず物學此方の甚しき害まを
りてすべし御國人の物學此をいふべし

ありく(却テ)

左のしした
キヨノトシハ屋之
トニノ入ル

三百年、徳川時代

分ニナリ

あがす「不足克
漢カ

はと星のたしと知ハ多くハこそよる事
おそ心ある者ハ深く慨ふべき事あるまな
ありよ心づく學者ありしを此の二百年を
あり以來歌文の學漸く開けてよ星漢字漢文
の不便ある事をさとりて私の著述ハ假字
文をのを用ふる人も多く出来しけれとな
公さまの文書ハ假字をバ用ゐさせ給をさ
りなせバ心ハあつて思ひあふらせん方
くて時としてハ漢めきたる文をまかり
得あらざりしを今の大御代とありてより上

かこしきや

天ぞある

明かす

もかこしきや
天皇が詔旨の御書も、假字を交へさせ給ひ、
下ハ天ぞある鄙の蝦夷の賤の子をまでも、ま
づいろも五十音假字單語をいふものより教
え導らせ給ひて、專御國語御國文を用ゐさせ
給ふ事とありおさるは、いと尊く忝き大
御恵ひて、御代の名おかふ明お治る時お生さ
あひたる人民此上なき幸ひて、今よむして後
ハ、えうなき字學の煩もあく、語と文とハ似て
もつらぬやうかる違もなく、吾とさとりよく

心ぞあり

心ぞあり

人よも教へよくなりて、容易く實學實驗を
なり得つむるを、世の為人の爲に甚く、
おのづのら大御國の御光も添ふとさされ、
心ある學者の十歳の憾も、全く此の大御代お
どあくなるべき、但かくありとて、今俄は漢字
をを用ゐて、漢文をお讀むとといふ、おわらぬ
其の心して、徒お年月を過して、實事實學をお
お妨ぐる事あく、心のまゝ、漢文をも誦し
ぬ、漢詩をも歌ひねとぞよ、
○真字してかける和文あり、
祝詞宣命 假字して
古事記等

○和文讀本緒言

四

「し」助字
ヨキヤ

「く」助字
ヨシカシ

「かへ」助字
マデカ

「傍」助字
ツマリ

「証」助字
ツマリ

「あつて」助字
ツマリ

「た」助字
あへる
ケンキエウニチル人

のける漢文あり。二十一代集の序然るも世の學者等

其體を分別することを知らざりて平假字を

るを「見まは」即和文ぞと心得て近世の儒者

等のかけるをさへも誰ぞの文くれがりの

和文をどいひてやめの「し」者多きはい

り傍い「し」事おて詮ぜるも和文を「の

て知らぬあり近世御國學の博士と世小ゆる

させ「る」きとの書るだもあや漢文の癖の清

くはりたるを「い」稀おて僅ふ一人二人を

るを明暮漢字漢籍をの「さ」だ「あへる」人等

の「い」で「り」よく「書」得「さ」さ「此」の書

今の世の極めて初學の誦讀此爲おとて物

さるおて「あ」く「よ」めで「く」り「を」し「雅」文

ハ容易く「さ」も「難」き方もあせ「バ」或ハ軍記或

ハ俗物語を「ど」より「さ」へと「多」き中「ハ」御

國文の體を「ら」ぬも又詞の「あ」や「く」さ「と」び「た

る」も「お」せ「ど」む「げ」は後世此「ら」ぬ「バ」さ「を」ぶ「は

お」の「づ」から「雅」びたる處ありて其の方「ハ」罪「ゆ

る」さ「る」こ「ち」せ「ら」る「な」り「を」ほ「文」體「の」論

また文の解しやうかど此細やうある事共を

あぐ
却て

「さ」とびたる
俗ナル

「あ」しく

フシギ

「あ」げ

一向トント

「さ」がみ

レカシテガラ

ソクワエウモノ

後世の「あ」か
後ノ世の「あ」か

「う」の「さ」

本朝文範の總論よりいへば、今を僅に一、二を下あいふべし。御國の語も、てにをはの係結といふをのありて、詞をあらたに調ふるあり。今見や、かからん處あり、其のかりり此詞あり、月をあらわす、むすびある、とつく。』のあり、あらわす、いをもゆる大段落。一、七小段落なり。

○凡てで文あり、意の急なる時、おのづから語の省り、概約まること常ありて、初學の輩、そ

の省り、せざる語とあらで、詞づらひのい、おどや、かこぶき思ふこと多く、今かゝる處あり、悉く傍に片假字して、と補ひ加へて示せり。さきど中か、古と今と詞のあらひさま異る。今此世の俗語より思へば、てゆを足とて、て、つ、なるやうと思はる、も古あり、常より、あ、雅あることあり、あ、類あり、今これて、をは、傍に補ひ加へたるも、あ、あ、多く、漏れつ。

○軍記物語等に見えたる消息文、上下を省き

てづつ、い、は、い、

カ、ミ、キ、ウ、ケ、イ、

武勇 遊戯 俳諧 羈旅離別附

哀傷

卷四

評論附 說解附 教訓誠附 諫爭

勅書 院宣御請成 將軍家御教書

消息

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

和文讀本卷一

稻垣千穎 輯

歷代

景行天皇の御世此段

中山忠親 公

日葉酢媛命

前のみづとは^帝垂仁天皇なり
次のみづとは^帝景行天皇と申しき
垂仁天皇の第三
此御子御母日葉酢媛命也
垂仁天皇の御世三十
年正月甲子日東宮小立給ふ
あのみづとは^帝あたり
の御子み申し給ふやう
あのみづとは^帝心は何とく得ん

と思ふとのさまふ。兄のみこ。弓矢なる
 ほとく侍ると申し給ふ。弟のみこ。弓矢なる皇位を
 あん得んと思ふと申し給ふ。この言は從ひて。こ
 のかみの御子は。弓矢を奉り。弟の御子を。東
 宮に立て奉り給へり。なり。辛未のとし。七月十
 一日位おのき給ふ。御年八十四。世をたのめ給ふ
 事六十年あり。五十一年と申し。内宴行ひ給
 ひ。成務天皇のいまごみこと申し。武内
 ことを。其の座に参り給む。ざり。そのむ。みあど尋ね

させ給ひ。お申したまを。く。人々のみを御あを
 びのあひご。心をゆるふ。働きをりなり。其の時。も
 一ひま。より。ふ心あるを。此も侍らん。と思
 ら。門を固めて。侍ると申し給ひ。あむ。みり
 とい。あ。あ。び。あ。く。罷。給ひ。武内。孝元天
 皇のむ。ご。なり。此の後。代々。此帝の御。後。み
 と。世。久。く。か。今。八。幡。乃。御。傍。
 近く。い。を。た。ま。へ。る。此。の。人。い。ま。五。十。八
 年。二。月。近。江。の。穴。穗。宮。に。つ。り。ま。き。

後三條院天皇の御世也段 神皇正統紀

北畠親房公

第七十一代三十八世後三條院諱ハ尊仁後朱雀

第二の子御母ハ中宮禎子内親王陽明門院三條

院北皇女ナリ後朱雀の御素意ハて太弟ヲ立給ヒ

キ又三條の御末をも受給ヘリ昔々カヨルた如

一侍リキ後朱雀三條兩流北内外ヲ受給ヒテ繼體の主とカ

マ後朱雀三條マシキ後朱雀三條戊申のト後朱雀三條即位巳酉後朱雀三條改元此の天

皇東宮後朱雀三條キテ久シクおとしましけをを去つあ

顯密佛教ノト

見エテリノ約
アリソクニエハ
傳ハツテアル

エトシハ在リ居ハ
敬語下ノチシ
ハ敬語ヲ加フ
記録書ハ或所

マニト云フコト上
レ多ク忝キ意
ハ人のハ過テシ推
急ラ推シテチ

和漢の文顯密のをしへもとも久しからせ去と

せ給ふ詩歌北御製もあまこ人乃口子侍るめり

後冷泉の末ごま世の中阿れも民間北憂あまき

四月より位コノ天皇居給ひしをいまだ秋のをさめ

おも及むぬ世の中北なるりよける有徳の君

もともりくゆるとぞ申傳へ侍る始めて記録所

といふ所をおのきて國々の衰へるまをを

ほはをき延喜天曆より以降こおもまおとあか

しこ老御事ありけん以降天下を治め給ふこと

執柄 関白ヲ指ス

まらせ 司ラセ給

四年太子ヲ譲リテ尊號あり。後ニ出家せさせ給

ふ此の御時よりぞ。執柄の權あまらへらきて。君此

御みりあも。政をまらせ給ふ事。かへり侍をよ

し。はせど其の頃もども。讓國の後院中。ふて政務

ありとを見えぬ。四十歳あまらまらき

四月。高倉院。天皇の御世。北段 神皇正統記

北畠親房公

第八十代第四十三世。高倉院。諱ハ憲仁。後白河第

五の御子。御母ハ皇后平滋子。 建春門院 贈左大臣

時信の女より。戊子のより即位。己丑に改元。上皇

政をまらせ給ふ事。まらぬ。如し。清盛權を專らせ

し事ハ。まららら。此の御代の事あり。其れ女徳

子。入内して女御とせ。即立后あり。末の方。やう

やう所々。反亂の間。あま。清盛一家。北にさ。天意は

そあきける。まら。嫡子内大臣重盛ハ。 賢

まら。く。父の惡行。あま。諫めける。さへ。世を早

く。ぬ。彌。あま。りを極め。權をまら。たま。まら。時

の執柄。あて。菩提院。關白基房の大臣。あま。せ。まら。

如し。如し。天皇ノ時ノ如ク院中ニテ政ヲ行ハル

御所ノ入ル

女御女官ノ名

中宮ニ次ギテ攝ニ

御立后ニシテ皇太后

ヤリテ

大

大宰府に九州に
リコニ上官より駐

宣親王の名を勅
レテノグアラヌ

すめ頼政が進ノ

ふれし告テ

中らひ宜しめしぬ事ありて。太宰權帥お遷して
配流せしむ。妙音院師長大臣も京中を出さる。其
のちの罪せらるる人おなりき。從三位源頼
政といひし者院の御子以仁王とて元服ハあり
し。親王の宣なとたふあくて。かゝるもあ
宮よあをせしをすめ申して。國々おある源氏
の武士等お相ふせて。平氏を失ちんと謀るなり。
事あはれて。皇子も失ちせぬ。頼政も亡びぬ。か
のむとをれより亂れをぬるなり。義朝朝臣が子

頼朝前右兵衛佐從五位下平治のころ六位の職
人たりしが信賴事をおあしむる時任官と

平治の亂に死罪を申宥むる人ありて。伊豆國に

配流せしめて。多くの年をおくりしが。以仁王の

密旨を承る。院よりも忍びく仰遣を道ありけれ

ば。東國をまゝめて義兵を起しぬ。清盛彌惡行を

のそなきりしを。主上深く歎け給ふ。ちるのち

遜位の事あをし。世を厭はせおしけるゆゑと

ど。天下を治め給ふ。あし十二年。世の中の御いの

りも。平家のあがめ申を神なれむ。安藝北嚴島

悪行ハアキギョウ

尤るの早クセ

遜

世の中の御いのりや
ヨシヤヨク治マレハヨ
ト思ハレタノデアツカ
タカシラン
おがめハシヨウスル

おへめてたく
御心様うるかし

尊号
上皇
一アリ

承久の順徳
帝の年号
春ハ東シツカナル政ニ
春シツカナル政ニ
申トハアカナル詞也

御未トハタメシトナリ
御心例ナリ
御心ハ申スト云
フ言ナリ
聞エテ申スハ申上
タトナリ
おとハトハ大臣
トナリ
大臣ヲラトド、読ム
おほハ奏語詞
おほハ構ふるハ
思ハコシクハ即チカ
マクフハ御ボサウト思
マクフハカクスフ
おほハカクスフ
おほハカクスフ
おほハカクスフ
おほハカクスフ
おほハカクスフ

おあん。参らせ給ひけり。此のみりど。御心を
めでたく。孝行の御あくるさう。深かりき。管絃の
方もまじく。せまかき。尊號ありて。程を
く世を早く。あまふ。二十一歳。あまふ。た
承久三年の條 増鏡

一條冬良公

承久三年。ふありぬ。四月廿日。みありさせ
給ふ。春宮。四つ。あまふ。せ給ふ。ゆづり申させ給ふ。
近頃。みま。此の御齡。ふく受禪。あり。なま。おれも

おと。御未。あ。ん。の。同。三。日。今。あり。させ
給へる。を。新院。と。聞。ゆ。を。御兄の院。を。中院。と
申。父。みの。と。を。本院。と。聞。え。させ。この程
ハ。家。實。北。お。と。普賢寺殿。關白。お。て。お。の。つ。を
と。御讓位の時。左大臣。道家の大臣。光明寺殿。攝政。お
あり。給。彼。北。東。の。若君。乃。御父。なり。さ。も。お。ほ
し。構。ふる。事。忍。ふ。と。を。れ。ど。や。う。く。洩。聞。え。く。ひ。の
し。さ。も。あ。と。其。の。心。づ。の。み。を。お。め。り。東。の。代。官
お。て。伊。賀。判。官。光。季。と。い。ふ。者。あり。う。め。ぐ。か。ま。を

「この頃のイロハ」
コラレル

「押寄ハ平ノ直なる」
吹かた

「院ハ後鳥羽帝」

「隠岐の皇居ハ後
醍醐 天白王流シタ
ハ片宮ノ有様

「府島ハ又詳セノ名
黒木ハ宮ヲ分ス北木也
玉宸ハツイシテ即チ
天皇ヲサス
臣也

「御方ハ中女也」

「三位高ハ藤原氏
昔ハ以前シテ
ひきあへて打テカ

「御方ト読ハ
ツラキ下ガ竹
ノフシカサ
見ラ思出也

「涙墮リマシ松ののき
マツノカキノレキホ下流出
必ス立つるヌルヌカサ

「鶏人曉トリヲツカサ
鶏人曉トリヲツカサ
名催ル天宮ヲハシスル

「おどろきセウツ子
萩白明持朝政ハ存奉
ノ門アケル朝政ヲ

「周キナナル
楚ノ莊王巫山
巫山雲雨ト云フ山デゴラ

「三ツテ女ヲ無升ハシタ
三ツテ女ヲ無升ハシタ
三ツテ女ヲ無升ハシタ

「三ツテ女ヲ無升ハシタ
三ツテ女ヲ無升ハシタ
三ツテ女ヲ無升ハシタ

御（書）のよし仰らるれば御方（書）も參るつを
のども押寄せたる子ののるあきやうなくく腹
きりくろ星まづみとめをたまとぞ院ハおお
りりるあがまあもいみとらあきく騒ぐ
略下

元弘二年隠岐の皇居北條 太平記

北小路玄慧等作

三月廿六日と申す御船隠岐國（書）著きおけり
佐々木隠岐判官貞清府島といふ所ハ黒木の御
所を造りて皇居といふ玉宸お咫尺しそ召使せけ

る人といふハ六條少將忠顯頭大夫行房女房おハ
三位御局をとりあ星昔の玉樓金殿おひきつへ
てうきあし去げき竹たもた涙隙な松ののき
一夜をぬぐつる程もたへ忍ぶぬき御らちあら
ど鶏人曉を唱へし聲警固の武士北番を催を聲
たあり御枕の上お近々まば夜北おしお入ら
せ給ひても露まどろおせ給まは萩の戸乃明る
を待ちし朝政なけをとも巫山の雲雨御夢お入
る時も誠お曉ごとの御勤北辰北御拜も怠らば

引子北原拜ハ

愁心

配所島流シニシウ
月見テ浸ツナカス
一人位一人ト云フハ天皇

政カシハク
良襟一ノ天子モ
配所カ

日月誰為明耻
日月誰為明耻
日月誰為明耻

日月誰為明耻
日月誰為明耻
日月誰為明耻

日月誰為明耻
日月誰為明耻
日月誰為明耻

忘サシデアロウ

建武元年

後醍醐天皇ノ御年
北條高時ヲ滅シタ
年

大内裏 天子ノ住所

位をまうく
百官ノ場所ヲ設ケ
鳳闕ハ住所

よせらる「ナナル

地頭 知事ノ事
御家人ノ所領得々
朝生ニ使ヘリヨシカ

かけめたる
ツトリニナル

殿 一ツノ所ニテ

石 石ノ所ニテ

ナノ所ヲカフ

こといひあはる年あまを。百官罪ありして。愁心

涙を配所の月おあはて。一人位を一人宸襟を他

郷の風よなやよ給ふらん。天地開闢よりあの

うさ。かふるぬぎをきかず。さきを天よかゝる

日月も誰が為より明なることを耻ぢざらん。心

あき草木も。是を悲しく。花さく事を忘るるべし

建武元年大内裏造營の條 太平記

北小路玄慧等作

建武元年正月十二日。諸卿議奏して曰。帝王の業萬機

事あげくして。百司位をまうく。今の鳳闕。僅るる

四町の内をまむ。分内狭くして。禮儀とく。のふ

所ありとく。四方へ一町づ。廣げらむ。殿をたて

宮を造らる。是あや古の皇居。及むね。大

内裏をつくらるべし。とく。安藝周防を料國。よ

せ。日本國の地頭。御家人の。所領の得分。二

十分一をかけめたる。抑大内裏と申す。秦の始

皇帝の都。咸陽宮の一殿をうつして。造らむ。たれ

む。南北三十六町。東西二十町の布。龍尾のを忍

長時ヒキツの論ロ

淑タケ子コ

石をもちあそむ。四方より十二の門をたてらるる。東
北ハやうめい待賢イウ門ナ南ハ美福朱雀
皇嘉嘉嘉の西西をたつてん談さうへき藻殷富門
北ハ安嘉偉あるん達だんちをん智この外上東上西
の二門守いたる守と交戦衛伍を守りて長時長
非常をいまいぬ三三十六の後宮三三千の
淑女よをほひとさう七七十二の前殿ハ文武
の百司みことのりをもつ紫宸殿の東西ハ清涼
殿温んぬい明でん北ハ當りて常寧殿ちやうく観

五節の神樂
舊曆十一月新
嘗祭の次夜行
儀式あり

ん殿貞觀でんと申さハ右きさをもちの北のみく
いげとの也校けうしよでんと號せ上ハ清涼殿の
南のゆむどのなり昭陽舎梨ハなつ叔つ不景去げい舎
やも桐壺悦ひきやう香舎ハ藤雷つ不鳥凝花舎梅ハ梅舎つ不
襲芳舎と申さ雷かんありのつ鳥不事あり萩の
戸陣の座瀧口の戸鳥曹の司さう司ぬ織ひとの兵衛の
陣上左ハ宣陽門右ハ陰明門日華月華ハ兩門ハ陣
北座の左右ハ對へり大極殿小こあ安との蒼龍樓白
虎樓豊ぶらく樂めん清暑堂五ごせ節ちのえん淵を大る大さい

新通
巨勢、金剛也

回禄火事ノ神ニカミ
カヨウモリ

蕭何。四の間ふを。伊尹。傳說。太公望。仲山甫。西の一
此間ふを。李勣。虞世南。杜預。張華。二の間ふを。羊祜。
揚雄。陳寔。班固。三の間ふを。桓榮。鄭玄。蘇武。倪寬。四
のまふを。董仲舒。文翁。賈誼。叔孫通。あり。畫圖。ハ金
岡。筆贊の詞。ハ小野。道風。が。あ。た。う。り。る。と。を
承。鳳のい。ら。あ。天。よ。あ。け。り。虹のう。つ。は。り。雲。子
と。び。え。さ。し。も。い。み。と。く。造。り。雙。べ。ら。を。大。内。裏。
天災を消。は。便。あ。く。回。禄。た。み。く。は。あ。よ。び。て。今
ハ。昔。の。礎。の。と。殘。り。の。下。略

同ハ時

内辨門
テ。チヨウド
アゲル

大極殿ハ八省
院の正殿にて
重き儀式ハ皆
此処を行はし
内辨とい儀式
の時門内ニ居
て諸事を辨備
せらるるをいふ
門ハ朱雀門ハ
大極殿の南
門をいふ云々
朱雀門の左右
の陣鼓吹騎
兵等を列しわ

是を朝拜とも申をあり。辰の時。天皇大極殿に
行幸なりて。行をせたまふ。羣臣みな禮服を
著して。さあ。あ。も。御即位の儀式。お。あ。あ。内辨を
ども。あ。開門。など。あり。て。め。の。つ。み。を。う。と
む。れ。バ。羣臣。列。し。門。ハ。入。る。天子。高。御座。を。つ

朝賀 公事根原
正月元日

一條兼良公

近仗 近衛
近江
近江
近江

近仗の近衛の
典儀ハ少納言
香ハ淺香薰陸
香青木香等ハ
舞踏ハ再拜七
勢ハ置キ立テ
袖を左ハ舞
右ハ舞ハ左
取テ小舞ハ
又再拜モ
アリ

檀原宮大和

瑞

饒速日命の天
其子宇麻志麻
治命の神武天
皇ヲ奉ラシキ
十種の神宝と
小朝拜ハ朝拜
カキ年関白大
臣以下殿上の
人清涼殿ハ
天子を拜奉
儀ハ百官
悉クハ拜セ
朝拜を略ス
故ヨ小朝拜
アリ

御宇

のせむしをへを兵庫寮鉦をうり執翳出でる帳を
八字をかき近仗けいひつをあようし圖書主
殿香をさく典儀再拜をとをふ羣臣ハの時再
いを奏賀奏瑞とく二人のを此庭ハすくく祝
ひまうをことなりあをハ去年此めをた如事ど
そのあるを國々よを申せばそれを記して今日
あをを奏するあり此時羣臣再拜をつぎに舞
踏をれを武官萬歳の旗をふるありいとめをた
き儀式ともあり神武天皇元年正月一日檀原の

宮をたぐもつめく位おつのせうまひくる時宇
摩志麻治命天瑞を奉らるるあり日本紀に見え
りこをなるとや始とを申さべき又孝徳天皇
の御宇大化二年正月一日御かををのら
まべるありかな本書子のせたりあををのら
此朝拜とハ申ををのらむあををの六十六代一
條院正暦より後ハあをををうけたまはすは
こ記録も所見なきふやいあへハ大極殿も
ありこのをあり今ハ小朝拜をよりまぞあをを

春日社、大和國添上郡春日山あり、藤原氏の祖神、天兒屋命、建雷命、經津主命、比賣神の四神を祭る

府の官人とし、近衛の將監、神宮府まかせ、無名門の清涼殿の南におき、うねき衣の事あり、大うらき小うらき等

内侍の内侍の女官あり、瀧口の池とあり、瀧口の名にて清涼殿の北あり、武人の布衣をきて、且暮此処へ候ををい

世衣束 カケモノ

御殿の清涼殿あり、御殿のかごは八夏に胡粉

春日祭 建武年中行事
二月の條

後醍醐天皇御製
北畠親房公修撰

上のひつとれ日、春日祭の使たつ、近衛の中少將未こををつとむ。昔ハ賀茂の祭祭此おと。今ハ近衛ズハビシ比隨身をどむの望ぞ見ゆめ。府の官人、是り心着まきて舞人をつとむ。賀茂のまわりれおと。使無名門のまへまありて、事乃よきを奏を舞

人まの物音をとり、藏人あき。祿のうらきひとく音たりたやふ申の日、曉内侍むり、藏人出車向を奉る。瀧口供とまきさふらふ公卿、弁もけをむらふめ。

更衣 建武年中行事

後醍醐天皇御製
北畠親房公修撰

四月の朝、御更衣たもきバ、御装束まらむ。御殿御帳のかさむ。おとてまき。

和文讀本卷一

十三

女房ハ女官ハ
同シハ
四月申
ハおもひきぬ
小て單ハ更交
精好のひとへとて
御好のまじし
御好のまじし
御好のまじし

撰出 陰九月

あなごち
是北トホラ

嵯峨野 (京都)
殿上人 (八人)

誰人 (殿上人ノ内)

社司カシ

カシトエ
ナトホロツタエテ
カシ

清和天皇 貞純親王
經基 滿仲
頼光
頼信 頼春 頼家

六十八代 後一條天皇
長元元年

ふんふき繪をかき。うへへる皆徹を。夜のかし。も同ト。燈籠の綱。同ト物なれども。新しをせうへ。たみ同ト。志とねか。御ふくハ。御た。御ぞ。の綾。此御。御より。は。内藏。寮より。是を奉る。女房の。あ。せの。常の如し。

撰出 公事根源 九月の條

一條兼良公

是をある式ある事ハ。殿上の道達

殿上人とも遊び。嵯峨などへむ。ひ。虫を籠子。び入。奉。是ハ堀河院の御とき。より。松あり。鈴あり。誰人とも内裏。奉。又賀茂社の社司など。仰ら。め。あ。

軍旅

源頼信 平忠恒とせむること

宇治拾遺物語

源隆國卿

和文讀本卷一

十四

坂東（北）

無キニスル
アイガシロニ

野

海（第陸下總ノ
カスミガウラ）

川（シモウク）

ぬ（る）

せりしよし
スルコトガデヤル

軍（早谷）

昔河内守頼信上野守ふてありし時坂東平忠
恒といふつむものありき朝廷ヨリ仰せらるるあしアあきア
ガゴ討とくおとるウうたんとく多くの軍あつて
彼がすまかの方へ行向ふ入海北遙アはし入
りたるむのひみ家を作りて居るお北海をま
もるものあつて七八日おめぐるアめぐり渡
らむその日北中お攻めつアおとる忠恒渡の舟
どもを皆取隠してけりされば渡るべきやうも
あり濱をたよりち立ちとのおの濱北まゝおめぐ

るべきおころをあきと兵ども思ひたる上野守
のりおやうこの海北まゝお廻りてよむ日頃
へあん其の間みやア寄せしをぬくまへ
もせしをあん今日けあの中よよを攻めんアこを
のやつ奴存外アよしてあをくよをせんずれ然る
お舟ども皆取隠したるアおとすアと軍ど
をよとををくま軍さくま渡り給ふお見やう
なり廻りてころをハよをさ給ふべく候をめと
申したればあの軍どもの中よアおとすアこれ道

つじ (フアロ)

摺

たろのめ
ナガイナイ

渡せ (ワ)

ありたる者ハあるも頼信ハ坂東をこの度
を始ぬ見えされども我が家のついでに
置きたる事あり。此海の中ハ堤のやうな
廣一丈をのりて。直にこの道あり
深ハ馬のふとむるもたつとさく。此の程に
を。其の道を當りたるらぬ。さうとす。此の程に
軍どもの中ハ志をふるもあつとん。はしつ先
らて渡せ。頼信つとさく。渡せんとして馬をり
えやめてよせぬを。知りたる者ハやありん。

たごあたり
ハワキモニス
ワケル

たちし (ア)

ガ (ガ)

十五 (ケ)

たご (ア)

ハ (ガ)

カヨウニ
カサレ

カヨウニ
カサレ

四五騎をこのり。馬を海におあろし。たご
を渡りなれば。そのまのつき。五六百騎はりの
軍ども渡り。おとす。馬の大腹はなちて渡
る。多くの兵どもの中ハ。三人をこのり。この
道ハあり。つとさく。残ハ露もあつとさく。聞
事をおもなりけり。然るも此か。このあ
國をを。このあ。始つとさく。我ハハ
此重代の者共。おとす。たあもせぬ。志
ぬ。おとす。給へる。ハ。げ。人ハ勝。つとさく。

あぢ(ワリ) 程叶ッ 船主人申りん(ワリ) こそ(カヨリウツ) 強ク

とめく(ドツカ) コツカ してん(アロツ) さうあは(アロツ) 揃へ(用意スル) 耕テ せさせ(ドツナサ) イマスカ

あんソ(詞) ぞいたナリ 奉(軍) ぢやあぶ(ケライシヤ) 書(ヤシヤ) 長(カシヤ) 受取(目録受取) 受取(ミレテ) ありたり(謝罪) 状(シテ) あり(シタル) あり(シタル) あり(シタル)

の、道うあどさうやきあぢと渡り給ふ程よ忠
恒ハ海を廻りてをよせ給らんぞとん舟ハ取隠
われハ淺道をバ只我をのりこそ知まらぬ直
おハ得渡り給ふ濱を廻り給らんあひごみ先
とめくもい処もいせんさうあくを得攻め給ハ
トと思ひて心静ハ軍揃へて居あるお家のめぐ
りある郎等あはさう走來て云く上野殿ハこの
海の中ハ淺き道の候ひらるより多くの軍を引
具しそ己ハあくへ來給ひぬいあぢせきを給え

んと見あさき聲ハありていひけをバ忠恒ク
ねくの仕度ハ違ひて我事では攻らせあんだか
やうハ仕立奉らんと云ひく忽ハみぬうぶを書
きさうふまをさみハ扱てさう上げて小舟ハ郎
等一人のせく持せく迎へて參らせたりはを
守殿見て彼此名簿を受取らせく云くかやうハ
名簿ハあふりぶを添へて出させでささ
さうありさればあぢのちハ攻むべきハ非だ
てあこの文を取きて馬を引返しけをバ軍ども皆

いとし 益々
勝つて読む

歌ガ

歸りけり。其の後よりいとし守殿をバ。殊に勝せ
ていみじた人におちりまはと。いよく心を給
ひたり

陸奥國十二年の合戦の時義家貞任此
連歌 古今著聞集

橘 成 季

伊豫守源頼義朝臣貞任宗任等をせむらあひど
みまのく十二年北春秋をおくりり。鎮守府
をたもて。秋田の城おうりり。雪ふりて軍

タテ
官ヤカ
館ツカ

貞任ら一共

せえふせえ
セナツメル
きたんも
うしろ
かなーワイ

のをのこどもとのよるひ。皆あつたへおありりけ
る。衣河の館岸高く川ありり。楯をいたさき
てかぶとをかさね。いづとをくらみとせあ戦ふ。貞
任らたへせし。つひに城のりり。よりのが
せあちりる。一男八幡太郎義家衣河におひら
せえふをくらみ。またあくらみ。ろを見せむをのり
あ。あちり引く。せ物いなん。いもせたり。これ
バ。貞任見かへりた。まらみ。お
衣北たてを。ほろろびりけり。

和文讀本卷一

十六

五あろ カブトノ
ウシロ

まげたる カ

やさし ツリカシキ
情入

腹あしき人
ヨクハラシエツ
ル人

あらん アハカシラント思
ハレル
あ不しくて
思ハレタト見ル

我を我ト思ハシモノ
モモハ 自カト思フ
モトモハ

如法夜中
其夜今現ニ夜
中

とらへるけり。貞任くつむをを申す人。あつら
さりのむけく。

年をへり糸のみを此くさす。

とつけたりりる。その時義家もげたる矢をさ
らして取りもけり。さむのり此戦の中ホヤ

事かま

小松内大臣殿兵を召せよと

作者不知或云
葉室時長卿作

内大臣ハ入道あちも腹あしき人あまバ院參の

源平盛衰記

事もやあらんぞうんと思しぬけきバ其の
悪行を塞がんがためにあがしくて主馬判官
盛國を使ふく重盛あて別しく天下の大事を
聞出しし我を我と思はん者どもハ急ぎ參せ
とをよあさきたり。あれをうけたまはるもの
ども。おほろげしくも騒ぎ給をぬ人のかゝる
仰の下るをもよひく別の子細此あるよこそ
難波二郎經遠妹尾太郎兼康筑後守家貞肥
後守貞能らを始としく。如法夜中の事をさすと

候ハヤヤ
そウカシメ

たづママカろ
タコシノア
カンケイスルモ

平等院宇治川
南

も我先子ハヤシとど馳ハヤシせ参りける。かハヤシりハヤシバ老い
たるも若ハヤシきも止ハヤシる者ハあハヤシし。小松殿へとてあを
て参りハヤシり。入道ハ何事ぞ世間のを此ハヤシさわがし
たハあハヤシま候へや。とのハヤシまひハヤシまハヤシとハヤシを
ら聞ハヤシのハヤシせハヤシてハヤシをハヤシせハヤシいでハヤシけハヤシまハヤシをハヤシ。西ハ條ハ青女
房。老尼をハヤシしハヤシハふでハヤシとりハヤシをハヤシのハヤシをハヤシぞハヤシ残りハヤシるハヤシ。少ハヤシし
も弓馬ハヤシみなたづハヤシさハヤシをハヤシ程ハヤシの者ハ一人もなハヤシありけ

略下

治承四年五月平等院の戦ハヤシ。足利忠綱

宇治川先陣のハヤシこと

源平盛衰記

不知作者或云
葉室時長卿作

此の河ハ浪早しといへども底深ハヤシうハヤシむハヤシ。岩高ハヤシ
といへども渡瀬多し。河と渡して岸をかハヤシす事
ハ。燈ハヤシ此ハヤシるハヤシもハヤシ中ハヤシうハヤシ。手綱ハヤシのハヤシあハヤシやハヤシつハヤシりハヤシ。おハヤシあハヤシまハヤシ馬ハヤシの足
をハヤシうハヤシぞハヤシへハヤシとハヤシ浪間ハヤシをハヤシ分ハヤシけハヤシよハヤシ者ハヤシどもハヤシとハヤシてハヤシ進ハヤシむハヤシを
むハヤシ。然ハヤシるハヤシべハヤシきハヤシとハヤシをハヤシ伴ハヤシふハヤシ者ハヤシどもハヤシ。略三百餘騎を伴ハヤシひ
ける足利又太郎真先ハヤシかけハヤシと下知ハヤシあハヤシり。此の河
を流ハヤシあハヤシくハヤシして底深ハヤシし。大事の河ハヤシぞあハヤシやハヤシまハヤシあハヤシま

渡ハヤシしハヤシワハヤシタル
岸ハヤシをかハヤシとハヤシす
宇治川ノ岸ニシテ
ハヤシノ岸ニシテ
ハヤシノ岸ニシテ
手綱ノあやつり
らぞハヤシ調子ヲ取ハヤシし
下知

屯くうんナ
をづまば馬カハカス
カミチチガ
せんれ

笑うあらせ
注意セヨ

あづく 引キ

うづぶきノル
カウドノ
テケン

み肩を並べし手を取組下まきつらん者とバ弓筈
み取つめせよ。強き馬をバ上手へ立てよ。弱き馬
をバ下手み並べよ。馬の足は幅づのん程ハ手綱
城をくろいで歩ませよ。馬は足もづまバ手綱をく
せでおよげせよ。前輪ハ多くかくを。水越さバ
馬のさうづ三頭も乗りつゝ水ハ多く力を入れ
よ。馬ハ軽く身をうくべし。手綱ハ實をあうせ
よ。さうをどを引うづくを。敵ハ目とあけよ。餘ハ
仰のき内首裏のぶと射描さまを。餘ハうのぶさくてハ

矢ぶ平まつくり
矢崎ヲアラヤテ
リシノ如クニスル

るあ 加

本苦ハ
下苦ナシ
ヨロヒノ後ガナリ

かわ渡し
マスケニ馬ヲ渡ス

ん射ヲさまを。鎧の袖をまのううまあくよ。水の
上ホドもて身づくろひすを。我真ハ馬弱しとて。人ハ
馬よかくりく。二人あがら押流さるを。我等渡
すと見るホドなるとむ。敵ハ矢ぶをまつくりて射ん
どしん。敵を射るとも。かのくあへし矢射んと
て。河の中よて弓引て。推流さまて笑をるを。弓
の本筈童わともす童がりみうあけよ。あま童さ
心を童つよな童し。えいお名出して渡を童。かね
は渡してあやまあまを。水ハ従ひくを。直絶

三段ばかり
 (一) 二 三 十 間
 さし 証トイキリ
 ロヨキ形容

宇田川ノ水ガト
 入るハドイ

たまらざ
 タチノ能ハ六


たり。子渡きべしとて橋より上へ三段をあり
 うちあげて三百餘騎さとうち入をえいくと
 をえきさけびて渡りたり。橋のえしへ一段さ
 がらど三百餘騎一騎も流さば皆ぐしておの
 ひの岸へさとおのりる。こをを見て千騎二千騎
 打入むく渡りたり。二萬餘騎馬と人とよ防を
 て漏るゝ水おを見をさうりけをみゆり前後
 此勢おつゝあずして十騎二十騎渡りける者
 と一人もたまらば押流さる。大勢河を渡りけ

ユンズエ
 弓杖
 つきす 疾
 金物 (カサリ) 三時頃 節々
 未の時 俗ニテフヒル
 白星 シヨロイ
 居頭 大黒中
 頭高 ヨウニケル
 星 皆孫ナクマキニタ
 連銭 皆孫ナクマキニタ
 白星 皆孫ナクマキニタ
 十四 皆孫ナクマキニタ
 木ツクツツツ

まは宮の兵を去る。平等院に引退く。足利
 又太郎ハ西北岸おうちあがりて。鎧踏をり弓杖
 つき物の具乃水走らうり。鎧づきす。鎧ハ緋をど
 お金物うちいも。未の時と見え。白星の
 かぶと居頭お著る。大中黒の二十四さうさる
 矢頭高お負ひ。重藤の弓北真中取り。紅のほろり
 け。連銭葦毛の馬北太くたくお。金覆輪
 の鞍置きを乗らうり。平等院の總門北前
 打寄て。皆紅の扇をさうり。鎧踏をり弓杖の

大くなくましし

コエチえ気ヤウシヤウ

金覆輪  四置キテアリ

總門 大門也

けんしやう

ゴ本ウビ

知らぬ 小野ハ澤山
テヲ不エ
ラニモ又

粟津原 近江ノ南
最後一死スル

きて申しけるハ只今宇治川の先陣渡せるハ昔朱

雀院の御宇承平ハ將門をりちけんしやう預り

下野國の住人俵藤太秀郷が五代の苗裔足利

太郎俊綱が子ハ又太郎忠綱生年十七歳童名王

法師小事ハ知らぬ大事の軍を三箇度いまご不

覺仕らぬ 下略

粟津原の戦源義仲最後北條 源平盛衰記

去年六月小水曾北陸道とより 葉室時長卿作

極 主從

中有 生キ居ドテ
死ヌテアル即チ
アノヨトマヨノ
サカエノ

なんでふ 下ッレテ

日未 ミラマテ

騎と聞えしハ今四宮河原と落ちけるハた

ごハ騎小をまぎさるる粟津のををハハた

心ハ猛く思へども運の極の悲しさハ主從二

騎小なりみけりあして中有北旅の空獨ゆ

ある道をまば思やるおを哀をあれ 木曾殿

踏むり弓杖突て今井ののさもひけるハ日ご

ろハ何と思もぬ薄金ガあどやらん重く覺ゆ

る也とのたまへむ兼平あんでふさる事侍る

べき日來り金も増らぬ別り重き物をもつけ

御方ミカタ

臆オソレハガケ

わらびれヨリゴヨウノヨウエヨナ

一ヒラガリまらコモリ

程ハ問ト

ヤガスグニ

斬ツ

くどキトキス

たごリワカ
いのもも
死シトスレバドノヨク
ミモヤルニ

いのもも

さすグ名ニツムカヌ

うりるベシ
ザシチナフデアレ

ぞ御年三十七ミナ御身盛ミあり御方ミ勢セありを
臆オソレ給ふコ兼平カニヘ一人をを餘ヒの者千騎萬騎と
もおぼしめし候ふべしつひ死ぬべき物故
まハわらびれ見ミ給ふをハあのおのハひの岡ノ見
ゆるハあとの松ノ北下ノ立ツ寄り給ひて心ハ去クつ
の念佛申して御自害候へ其の程ハ防矢仕
りてハヤガスグニ御供申せべしあハの松ノ北下ノハ廻
らむ三町ノ直ツみハ一町ノみハよもすぎ侍らト急
ぎ給へとあハくく涙ハを押へくとさハルハ木曾ハ

を惜みつ都ハさハいハあハあるハあハり
つハどもハあハまハどハ落ツ來ルつるハ汝ハと一ハ所ハ死ス
あんとハなりハいハ川ノ迄ハも同ハ枕ノ討ツ死スせんと思
ふありとのハまハんハむハ今ハ井ノいハのハみハかくハいハのハまハ
ふぞ君自害ハ給ハをハ兼平則討死ハあり是ハをハまハ
一ハ所ハ死スぬハとは申せ兵ノの剛ハあるハと申ハハ
最後の死ハを申ハありハさハすハが大將軍ノの宣旨ハを蒙ル
る程ハ北人ノの雜人ハ北中ノお打伏せしハきて首ハをとハ
きん事ハ心ハうハのハるハべしハとハくハ落ツ給ハひハ御自害ハあ

暇トハノ引ハカ馬ノ行キスハトハスハトハスハ

馬ノ引キスハトハスハトハスハ

うつ一馬ヲトツラス

どカく一イク

るべしと云々め々をば木曾誠子と思ひむらひ
の岡比松をさしと馳行きけり今井ハ木曾を先
だより引返しく命も惜まらず戦ひ乃々木曾ハ今
井を振捨て暇に任せて歩ませゆく比を元曆
元年正月廿日の事をを峯の白雪深くして谷
此氷もしけざり乃々向の岡へを去るひゆと志
しづらく結べる田を横ふり乃々深田に馬
を馳入せりうてどもゆのさるけり馬も弱り
主も疲れ乃々ををとかくもをどもかひぞか

能引ヨリ

き木曾ハ今井やつとくと思ひゆりしるへ見
返りたるけるを相摸國の住人石田小太郎為久
ゲ能引て放つ矢小内兜を射させと真額を馬の
頭にあてり乃々のぶしゆり乃々為久が郎等
二人馬より飛であり深田中入里て木曾を引落
しやぐく首級を取てける今井是をみて今最
後の命ある急ぎ御供參らんとして進出せし申
し乃々日來を音あもさしけん今ハ目もみ
よ信濃國の住人中三權守兼遠が四男朝日將軍

の御めのご乳母子今井四郎兼平あり。鎌倉殿もごも
あろしめしたる兼平を首とりて見參ふいせよ
やとて數百騎の中あけ入て。さんげは戦ひけ
せども。大力此剛の者ありたれば。寄て組む者ハ
あし。たゞ開きて遠矢ののみぞ射らる。さきとも
よろひとけをを裏の缺ず。あきまを射ねバ手も
おもひに兼平ハ。箭も残るハ。まぢの矢も。ハ。騎射
かしくなる。太刀を抜て申しける。ハ。日本一の剛
武者の主人ハ御供ハ自害とる。見なすハ。東ハ

箇國の殿むらとて。太刀の鋒口ふくも人馬も
さあはまふあち貫きくそ死しける。兼平自害
の後ハ。粟津此軍もあつりたる。

壽永三年二月。生田森の戦ハ。梶原二度

此かけの事源平盛衰記

不知作者或云
葉室時長卿作

梶原ハ。今七軍はをひしなり。寄せよ者共とて。子
息の源太相具し。五百餘騎をぬいて中へ入
まらる。此の手ハ。新中納言父子。本三位中將大

將として御座しけるが敵内に入り見給ひて
二千餘騎を差向けて梶原が五百餘騎を中取
あめて餘すも漏れあし一時をりぞ戦ひける
いづれも互ひひらぎりけるがはるる無勢あれ
バ梶原下手に廻り颯と引てそ出たりける源太
をいひあし問へむ御方を離れて敵中取あ
めしれ給ひぬといふあな心うやうやハ討まぬ
るあや景時生きて何れせん景季が敵に組んで死
あんとて二百餘騎を相具して平家の大勢つけ

内に入り聲をあけて相摸國北侍人鎌倉
權五郎平景政が末葉梶原平三景時ぞ彼の景政
も八幡殿の一に郎等奥州合戦の時右に目射ら
せながも其の矢を抜りぞく當に矢放射返し
て敵を討ち名を後代に留めし末葉をまば一人
當千のつをそのぞ子息景季がゆくへおぶつあ
なきて返し入せり我と思ん大將も侍も組め
やくと名のりのけく響城比べく責入るるを
名ふやまこしお恐せけん左右へさしを引退く

源太尋ねよとて責入り見せバ景季いまだ討せ
ぬとゆめハ菊池の者どもと射合ひけるが後ハ
ハ太刀を抜合せと名のりけをわがことも誰ぞ菊
池三郎高望ぞとぎみハ誰ぞ梶原源太景季と名
對面して切合ひより源太ハかぶとをうち落さ
せおわわとちゆく三十餘騎ハ取籠めらせて切
合ひけるが菊池三郎ハ押並べて引組て馬の際
ハ落重りて菊池ガ頸をとり太刀の切鋒ふさ
貫きと馬ハ乗出でけるが父の梶原ハ行合ひた

平三景時源太をうしちあをりして矢あててよ
進と禦戦ひひの其の間ハ源太ハ鎧させあは
やまめと寄せり返しの戦ひける城戸口ハ真鍋
四郎五郎と名乗て出合ひるが四郎ハ梶原ハ
うしちぬ五郎ハ手負ひて引退く平家の兵ども
入替く戦ひけり景時ハ源太ガ死あぬ嬉
さハ猛く勇ましく豎さま横はら戦ひたりあむ
息をよつきりむを父子相具して引て城戸へぞ
いづみりるを梶原ガ生田森の二度めか

數島ハ大和といふ詞の地詞
 和歌の詞の地詞
 詞の略しを數
 島の道といひ
 て歌の詞といひ
 とせざるあり
 古今集の序に
 難波津淺香山
 のうたと歌の
 父母のやうな
 りといへるま
 りとせざるあり
 難波津といひ
 いひて歌の事
 あり

けしといもをけれ 詩歌管絃ハ公家仙洞の翫
 之の東夷いこのぐう 數島難波津のじとむと存
 ぎべきあをむとも 梶原を心北剛も人小勝をす
 さたる道も優ありり 咲きみごせたる梅が
 枝を やあぐひよ添へくとぞさしりり かくを
 花ハちりけむとも ちひえ袖もぞ残りけ
 3

延元元年正月官軍都攻の條 太平記

北小路文慧等作

楠判官山門へ歸りて翌日の朝律僧を二千人作
 里うて京へ下し 此の戰場ありて尸
 骸をぞ求めさせたる 京勢怪とて事のしを問
 ひけむバ此の僧ども悲歎の涙をおさる 昨日
 の合戦も新田左兵衛督殿北島源中納言楠判官
 以下宗徒此のしりし七人まで討せさせ給ひ候ふ
 るどお 供養の爲も其の死骸を求め候ふありと
 ぞ答へけむ 將軍を始め奉り高上杉の人々是を
 さしとああありしやむぬとの敵どもが皆一度

和文讀本卷一
 三十九
 宗徒ナリ

京師
御
軍

お討をたりける。其のハ勝軍をバ志なきがら。官軍
京をを引たりける。いづくる其の首どりのある
らん。取て獄門みかけ。お多岐を渡せれて。敵御方
此戸骸どもの中を求めさせられども。是こそと
お布し。死首となりける。餘ふおし。まほしき。お
爰は面影の似たりける首。二獄門の木おのけと。
新田左兵衛督義貞。楠河内判官正成と書附をせ
らる。り。り。り。を。い。の。あ。る。お。く。さ。う。け。者。り。為。た
る。人。其。の。札。此。側。不。是。ハ。お。首。あり。ま。さ。け

おも書るをよ。この素と。秀句を。と。書副へ
て見せたりける。又同日の夜半をとり。お楠判官
下部ども。松明を二三千燃。つをさせ。小原
鞍馬の方へ。下。り。る。京中の勢ども。是を見て。
す。か。や。山門の敵ども。お。大將を討きて。今夜方
々へ落ち行き。あ。候へ。と。申。し。り。を。バ。將軍も。け
あ。も。と。思。ひ。給。ひ。けん。さ。う。バ。お。と。さ。ぬ。様。お。方
々へ勢をさ。む。け。よ。と。く。鞍馬路へ。を。三。千。餘。騎。
小原口へ。五。千。餘。騎。勢。多。へ。一。萬。餘。騎。宇治へ。三。千

餘騎嵯峨仁和寺の方まで洩さぬ様は固めよと
て千騎二千騎差分けて勢を置きざる方もあとの
をとりさそあそ京中の大勢大半減とく残る兵
も徒お用心するはなかりぬれはるをとも官軍
宵より西坂をあり下て八瀬藪里鷺森下松の陣
城とを諸大將ハ皆一手おありと二十九日卯刻
は二條河原へ押寄せて在々處々火をのけ三
所お開をぞあげたりける京中の勢ハ大勢なり
一時をよもあそを引軍ありもして勢をバ

發ハヨエト
誦ハ又

大畧方々へ分遣もさせぬ敵寄はるしとて夢も
も知らぬ事をせバ俄におあてあそをきて或ハ
丹波路をさしてむくもあり或ハ山崎を志して
逃ぐるもあり心も發らぬ出家して禪律の僧も
あるもあり官軍ハさまで遠く追はりぬるを跡
ま引く御方を追懸くる敵どと心得て久我暇挂
川邊ハ自害をしたる者も數をたすはどあり
ける況んや馬物の具を棄てたるまとい足の踏
所もなかりぬる將軍ハ其の日丹波北篠村を通

曾地の内藤三郎左衛門入道道勝が館小著給
へ。四國西國の勢ハ山崎を過ぎて芥川小ぞの
きよりの親子兄弟骨肉主従互小行方をししを
落ち行ぢりき。討れらる者をも生きとぞある
らん。憑えいきたる者をも討きてと死しつら
んと悲む。略下
延元元年五月湊川合戦乃條大平記
北小路玄慧等作
楠既小討を小けき。將軍と左馬頭と一處に合

ひく。新田左中將小打ちと懸り給ふ。義貞とを
見て。西宮よりあづる敵ハ旗の紋を見るよ。木々
北朝敵ととなり。湊川より懸る勢ハ尊氏直義と
覺る。是を願ふ所の敵あるとて。西宮より取て
返す。生田森を後小當て。四萬餘騎と三手小分け
て敵を三方より受られける。はるほど小。兩陣互
小勢を振ひく。関を作り聲と合は。しる。一番子。大
館左馬助氏明。江田兵部。大輔行義。三千餘騎小て。
仁木。細川。六萬よき小懸合て。火を散して相戦

ふ其の勢互に討せり。兩方へ颯と引きのけバ。二番。中院中將定平。大江田里見鳥山五千よきよて高上杉が八萬騎懸合て。半時をうり黒烟を立て、揉合ひたり。其の勢共戦疲きて。兩方へ颯と引きのけバ。三番。脇屋右衛門佐。宇都宮治部。太輔。菊池次郎。河野土居得能。一萬騎。左馬頭吉良石堂が十萬よき懸合せ。天を響く地を動して攻戦ふ。或ハ引組て落重りて首をとるもあり。とととをある或は打違へく。同じく馬よ

り落るもあり。兩虎一龍の闘も。何も討て者多の重けを。兩方東西へ引のたぐ。人馬の息をを休めける。新田左中將。是を見給ひて。新丁の兵既ふつきて。戦いませ。決せど。あま義貞の自當るべき處あると。二萬三千よき。残左右よたて。將軍北三十萬騎懸合せ。兵力を交へて。命を鴻毛よりも軽くせり。官軍の總大將と。武家の上將軍と。みゆりて戦ふ軍なき。射落さるまじとも。矢をぬく隙なく。組で下よあれども。落合て助くる

者なり。只子の親をどく。切合ひ。郎等ハ主小離
 せ。戰へバ馬此馳違ふ聲。太刀の鐔音いなる
 修羅のとうゆり。是ハハすを影オモカ。先
 軍國引きあさる。兩方の勢をも。今ハ
 のめをの期を下三あさむ。四隊此陣一處小舉り
 て。敵と敵と相交り。中黒の旗と。引兩ハ。旗
 輪違二と。東ハ肇き。西ハ肇き。磯山嵐小翩翩ハて。
 入違ひたるをり。あ。いつをも御方の勢とを
 早見。足利。新田足利此國の争。今を限とぞみえ

たり。官軍ハ元來小勢なき。命を輕くし。く
 戦ふ。雖遂小ハ大敵ハ懸負て。残る勢僅五千餘
 騎。生田森の東より。丹波路をさし。とぞ落行きけ
 る。數萬の敵勝よのり。是を追ふ事甚急あり。さ
 せ。もい。の。の。を。を。義貞朝臣。御方此
 軍勢を落ち延びさせん。為。後陣ハ引きささぐり
 へ。か。あひ。戦を。と。義貞の乗られ
 たる。馬。矢七筋まぐ立ち。あひと。小膝
 折りて。た。義貞求塚の上。あり。た。

て乗替の馬をもち給へともあへて御方是を志
らざりしるもや下りて乗せんとす人なりり
り。敵や是を見知りたりん。其の勢小取籠め
て是を討たんとしけるが。其の勢小辟易して近
くはし。小よらざりしるも。十方より遠矢は
射ける矢雨や霞のあるよりも猶繁し。義貞ハ薄
金との鎧。鬼切鬼丸と。多田満仲より傳り
たる源氏重代の太刀を。二振をのりたりける。我
左右に手小抜き持ちて。さとのる矢をバ飛越え上

る矢をむさうのふた真中と。りり射る矢と
む。二振の太刀を相交へて。十六まを切て落さ
む。小山田太郎高家。遙の山北よりへより是
我見て。諸鎧を合せて馳參り。己の馬小義貞との
せ奉りて。我が身ハ徒立小なり。追懸く。敵を
禦ぎけるが。敵あやこ。小取籠めと。遂小討せ
ふり。そのあひた。義貞朝臣。御方の勢北中へ
馳入りて。虎口小害を遁れたす。

和文讀本卷一終

和文讀本卷一

明治廿九年九月廿六日
尋常師範學校高等小學校用審
文部省檢定濟

明治十五年十一月十三日板權免許
同 年十二月 出版 定價貳拾錢
同 十八年八月十八日再版御届



出 版

發 行

東京下谷區練堀町二十四番地

新玉縣士族

稻垣千穎

東京下谷區練堀町二十四番地

普及舎

東京下谷區練堀町二十四番地

奎文堂

東京下谷區練堀町二十四番地



広島大学図書

0130449326

